

福 西 古 墳 群

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―五

福西古墳群

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

福 西 古 墳 群

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび集合住宅建設に伴う福西古墳群（29・32 号墳）の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

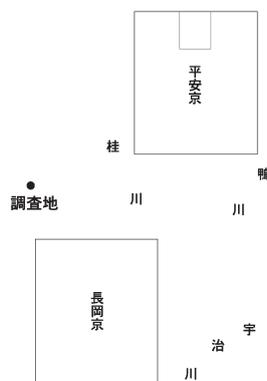
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 7 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 福西古墳群（29・32号墳）
- 2 調査所在地 京都市西京区大枝東長町1-208、209
- 3 委 託 者 三宅由紘
- 4 調査期間 2006年4月24日～2006年5月17日
- 5 調査面積 249 m²
- 6 調査担当者 菅田 薫
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「中山」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 古墳番号以外は通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 図1・2は調査担当者が、それ以外は村井伸也・幸明綾子が撮影した。
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 本書作成 菅田 薫 遺物実測は柏田有香が協力した。
- 17 編集・調整 中村 敦・児玉光世・山口 眞・近藤章子・吉本健吾



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	1
(1) 位置と環境	1
(2) 既往の調査	4
3. 遺 構	5
(1) 29号墳	5
(2) 32号墳	11
(3) その他の遺構	11
4. 遺 物	12
(1) 遺物の概要	12
(2) 29号墳周溝出土遺物	12
(3) 32号墳石室出土遺物	12
5. ま と め	13

図 版 目 次

図版1	遺構	1	調査前全景（北から）
		2	調査区全景（南東から）
図版2	遺構	1	29号墳全景（南東から）
		2	調査区西壁（29号墳墳丘）断面（北から）
		3	29・32号墳間断割断面（南西から）
図版3	遺構	1	32号墳石室検出状況（南東から）
		2	32号墳石室全景（南東から）
図版4	遺構	1	32号墳石室断割奥壁（南から）
		2	32号墳石室断割側壁（南西から）
図版5	遺構	1	32号墳石室内遺物出土状況（南東から）
		2	32号墳石室内遺物出土状況（南東から）
図版6	遺物	29号墳周溝、32号墳石室出土土器	

挿 図 目 次

図1	調査風景（南東から）	1
図2	32号墳石室の保護の状態（北西から）	1
図3	福西古墳群位置図（1：5,000）	2
図4	調査区配置図（1：600）	4
図5	調査前地形測量図（1：200）	6
図6	調査区西壁（29号墳墳丘）A－A'間断面図（1：100）	7
図7	29・32号墳間断割B－B'間断面図（1：100）	8
図8	遺構平面図（1：150）	9
図9	32号墳石室断面図（1：40）	10
図10	32号墳石室平面・立面図（1：40）	10
図11	遺物実測図（1：4）	12

表 目 次

表1	福西古墳群 古墳番号対照表	3
表2	遺構概要表	4
表3	遺物概要表	12
表4	遺物観察表	13

福西古墳群（29・32号墳）

1. 調査経過

当該地は、福西古墳群の北側の一画にあたり、対象敷地西側には外観からも古墳石室とわかる巨石が数石露出している。この横穴式石室をもつ古墳は、京都府遺跡地図によると福西6号墳にあたり¹⁾、京都大学考古学研究会編の『嵯峨野の古墳時代』では4号墳にあてられた古墳で²⁾、京都市遺跡地図台帳では29号墳に該当する。この石室に隣接する当地に集合住宅が建設されることになり、封土・周溝などが当該敷地に予想されることから、京都市文化市民局埋蔵文化財調査センター（平成18年4月1日付けで京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課に組織改正、以下「京都市文化財保護課」と略称する。）は、石室東側など3箇所の試掘坑を設けて、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、墳丘を画すとみられる石列を確認した。その結果を受け文化財保護課の指導の下、古墳の平面形、墳丘規模の確認などを目的に、石室東側の敷地の内、約200㎡を対象に発掘調査を実施することになり、当研究所が発掘調査を実施した。

調査は、平成18年4月24日から表土の一部を重機により掘削を開始した。調査の進捗に伴い一部拡張を行い、最終的に約250㎡を調査した。調査により周知の古墳（29号墳）のほか、新たに横穴石室をもつ古墳（32号墳）を1基確認するにいった。これらの遺構は開発後、建物下に保存されることになり、土嚢により覆って保護した後、埋め戻しを行い、5月17日にすべての調査を終了した。

2. 位置と環境

（1）位置と環境

福西古墳群は、京都市西京区大枝東長町・中山町・東新林町・北福西町に所在する。古墳群は、松尾山から南東方向に延びる向日丘陵の北西端に位置し、小畑川に西面する標高60mから70m



図1 調査風景（南東から）



図2 32号墳石室の保護の状態（北西から）

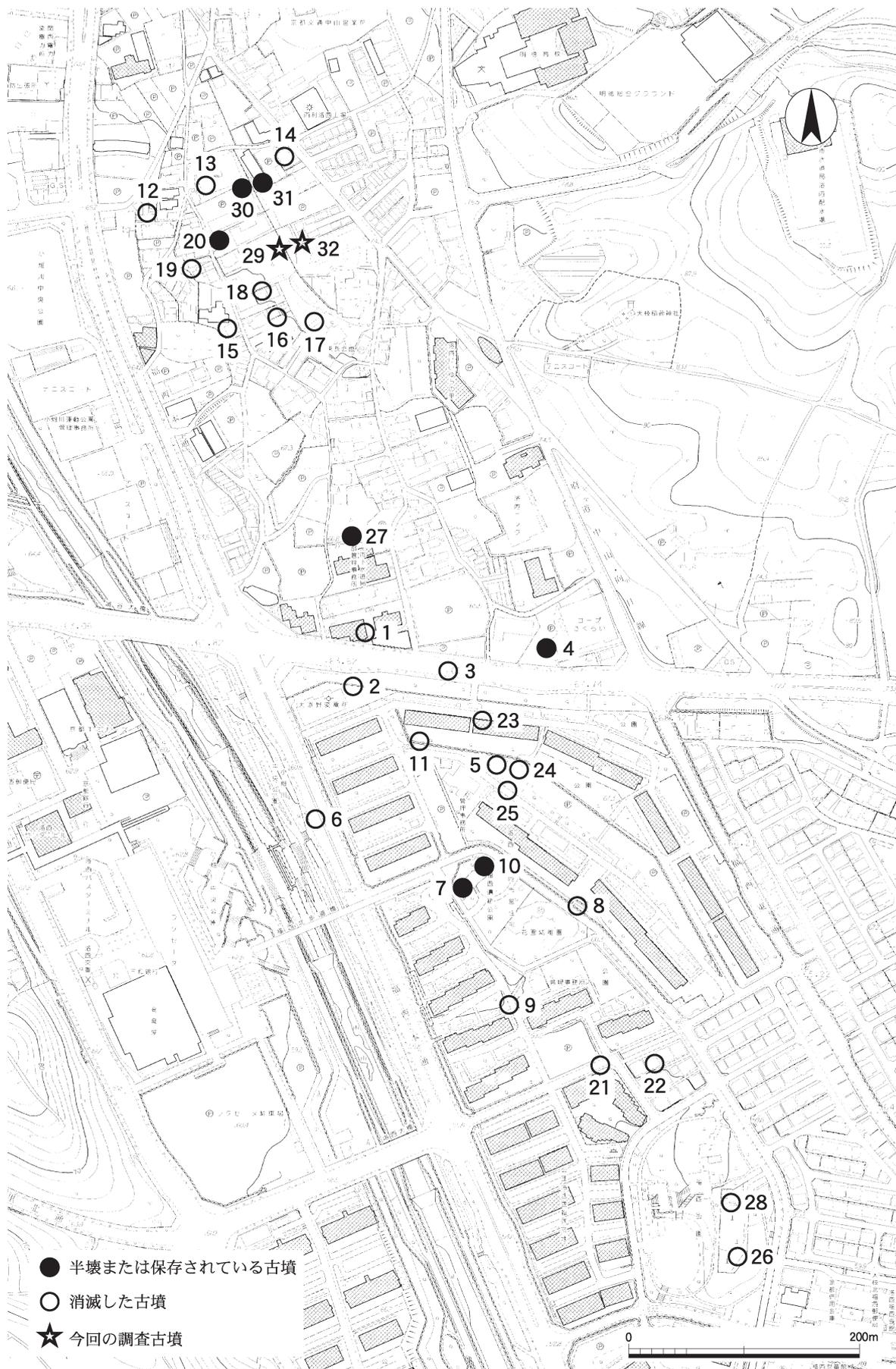


図3 福西古墳群位置図 (1 : 5,000)

表1 福西古墳群 古墳番号対照表

古墳番号				墳丘	現状	主体部	出土遺物	調査・文献	その他
市	府	西	京大						
1	10	1	11	円墳 径13?	消滅		須恵器高杯蓋	1970年調査 文献4	古墳?
2	11	2	12		-			1970年調査 文献4	古墳の形跡なし
3	12	3	13		-			1970年調査 文献4	古墳の形跡なし
4	18	4	14	円墳 径23 高4.5	保存	横穴式石室 両袖 玄室長4.5 幅2.1 羨道長5.6 幅1.1	須恵器杯・蓋・脚付長頸壺・ 長頸壺・直口壺・甃・有蓋 高杯、土師器高杯・台付壺、 鉄刀・刀子・馬具	1970・2004年調査 文献4・文献10	コープ洛西駐車場に 現地保存
5	13	5	15	円墳 径13 高1.2	消滅	木棺直葬?		1971年調査 文献5・文献7	古墳ではない?
6	17	6	16		-			1970年調査 文献4	古墳ではない
7	14	7	18	円墳 径15 高1.5	保存	木棺直葬 礫床排水溝 墓坑長6 幅2.5 深1.5 棺長3.5 幅0.7 木	須恵器杯・蓋 (攪乱坑出土)	1971年調査 文献5	福西遺跡公園内現地 保存
8	-	8	-		消滅	横穴式石室の排水溝?		1971年調査 文献5	
9	-	9	-	円墳? 封土ら しき高まりあり	消滅	石棺石材片(砂岩)出土		1971年調査 文献5	
10	-	10	17	円墳 径12 封土なし	保存	横穴式石室 無袖 長6.2 幅1.4	須恵器杯・蓋、土師器	1971年調査 文献7	福西遺跡公園内現地 保存
11	-	11	-	帆立貝? 全長40 前方部長11 幅15	消滅	墓坑 礫敷 排水溝		1971・72年調査 文献5・文献6	
12	1	-	3	円墳	消滅	横穴式石室? 組合式家形石棺			
13	2	-	2	円墳	消滅	組合式家形石棺 石棺を囲む退化型石室 長3.2 幅1.0	石棺内から頭骨・歯 平安時代の須恵器碗・皿・ 瓶子、土師器皿	1952年調査 文献1	
14	3	-	1	円墳?	消滅				
15	4	-	6	円墳?	消滅				
16	5	-	8	円墳?	消滅	組合式家形石棺?			
17	-	-	9		消滅				
18	7	-	7	円墳?	消滅	組合式家形石棺?			
19	8	-	5	円墳 径6 高0.5	消滅				
20	9	-	-	円墳?	祠	横穴式石室?			周囲より1m程高く なっている
21	15	-	20	円墳	消滅				
22	16		19	円墳	消滅				
23	-	23	-	不明	消滅	横穴式石室 礫敷 長2.0 幅1.0	須恵器杯・蓋・壺、金環、 釘・鏃	1973年調査 文献7	
24	-	24	-	不明	消滅	小石室 長1.8 幅0.5		1973年調査 文献7	
25	-	25	-		-			1973年調査 文献7	古墳ではない
26	19		21	円墳	消滅		須恵器片		
27	20	-	10	円墳	柿畑				周囲より0.5m程の 高まり
28	21	-	×印	円墳 径12 高2.0	消滅	横穴式石室?			
29	6	-	4	円墳 径16~18	半壊	横穴式石室	末木甕		本報告
30	-	-	-	?	半壊	横穴式石室		文献8 22号墳として報告	石室保存
31	-	-	-	?	半壊	横穴式石室 片袖		文献9 28号墳として報告	石室検出面での調査 建物基礎下に保存
32	-	-	-		半壊	横穴式石室	須恵器杯・蓋・壺		本報告

※ 単位はm

以下の文献を参考に作成した

市 『京都市遺跡地図台帳』 京都市文化市民局 平成19年度改定予定

府西 『京都府遺跡地図 史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図』 第4分冊 京都府教育委員会 1972年

洛西 文献4~7

京大 文献3

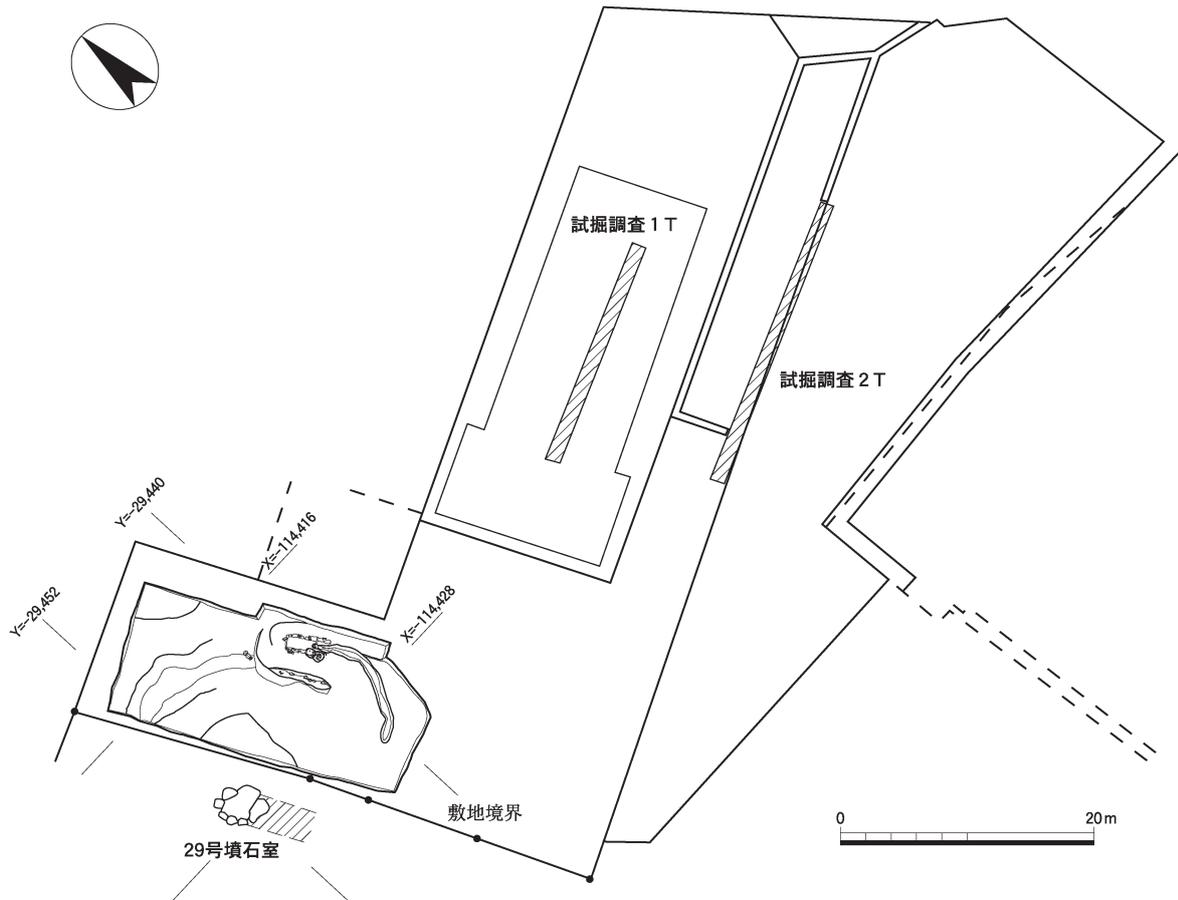


図4 調査区配置図 (1:600)

の低位段丘上に立地する。現在は北に国道9号線、東に府道中山石見線が通る。府道から東側は竹林、古墳群の南側はニュータウンの集合住宅および戸建住宅、古墳群の北側は旧東長町の集落であるが、新興住宅で竹林が開発され、わずかに果樹園と畑を残している。

(2) 既往の調査

福西古墳群の調査については、1952年に京都府教育委員会が2号墳(市13号墳)の調査を行い、組合式家形石棺を検出している³⁾。1970年に入り古墳群の南半分が京都市都市開発局により洛西ニュータウンの一面に組み込まれたことから、4年にわたり14基の古墳の調査が実施された。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
古墳時代	古墳(29号墳)	横穴式石室、排水溝(SD08)、石列(SX07)、焼土
飛鳥時代	古墳(32号墳)	周溝(SD03)
現代	土坑	石材抜取穴(SK01・06)
時期不明	土坑	(SX05)

1968年の向日丘陵地遺跡分布調査概要⁴⁾の遺跡地名表において、20基の円墳と2基の円墳とみられる×印の合計22基が報告され、1/25,000地図上にドットされている。1972年の京都府遺跡地図では、21基が報告されている。また、京都大学考古学研究会による「嵯峨野の古墳時代」では21基の古墳と1基の×印が報告されている⁵⁾。

福西古墳群の調査は、古墳群の南半分を占める「洛西ニュータウン」の開発に先立つ調査に伴い、1970年から73年までに合計14基の古墳および古墳推定地の調査を実施している⁶⁾。その後は大規模開発も一段落し、個人住宅などの小規模開発に伴う試掘・立会調査が中心であった。しかし、福西遺跡公園内に保存されている7・10号墳、コープ洛西駐車場に保存されている4号墳の各古墳番号は、府遺跡地図や京大の「嵯峨野の古墳」に記されるドットおよび古墳番号と対応せず、今回調査の対象となった横穴式石室をもつ古墳も、京都府遺跡地図では6号墳、嵯峨野の古墳では4号墳とされ、古墳に付された番号に混乱が生じていた。この混乱は、洛西ニュータウン開発に伴う発掘調査の際、文献4の「はじめに」の最後に「本報告では22基のうち、福西10号墳を1号墳、同11号墳を2号墳、同12号墳を3号墳、同17号墳を6号墳、同18号墳を4号墳とする市側の通称に従った。」とあり、ニュータウン開発敷地内の北側から便宜的に古墳番号を付加した開発側の番号を踏襲したことにはじまる。そこで京都市文化財保護課は、平成19年度改定予定の遺跡地図台帳作成に合わせ、古墳番号の対照を試み、従来の京都市遺跡地図台帳では地図にドットのみを落とし、番号が付加されていなかった古墳に新たに番号を付加し、統一を図った。

本報告では、京都市文化財保護課の指導により、周知の古墳を29号墳、今回新たに発見した古墳を32号墳として報告する。

3. 遺 構

調査対象地は、竹林として使用されていた。竹葉・竹根を中心とした腐植質の表土層下に、竹林の客土である10YR3/3暗褐色砂泥、10YR4/3にぶい黄褐色砂泥の混土層が厚い地点で約50cm、薄いところで約10cmの厚さで堆積する。地山層は、調査区の北側で5YR5/6明赤褐色砂質粘土(30～60mmの円礫混)、他の箇所では5YR3/4暗赤褐色砂質シルトであり、北東・南東側から西・南西側に向けて傾斜している。

調査の結果、29号墳の周溝とみられる溝および29号墳の東側で新たに横穴式石室をもつ古墳1基(32号墳)を検出した。

(1) 29号墳(図5～8、図版2)

29号墳は、調査区外にある横穴式石室を主体部とする古墳である。天井石とみられる長軸1.5～2.0mの石が2石と、その下部にやや小さめな石が露出している。石材は露出しているものはすべてチャートである。石室の北・南・西側は土取のため削平されており、今回の調査区の東側は比較的旧地形を残している。現状からみて石室は東西方向に主軸をもつ横穴式石室と考えられていた。石室の上面で、現況の標高は72.43m、西側の果樹園で標高71.0m、石室の東側の調査

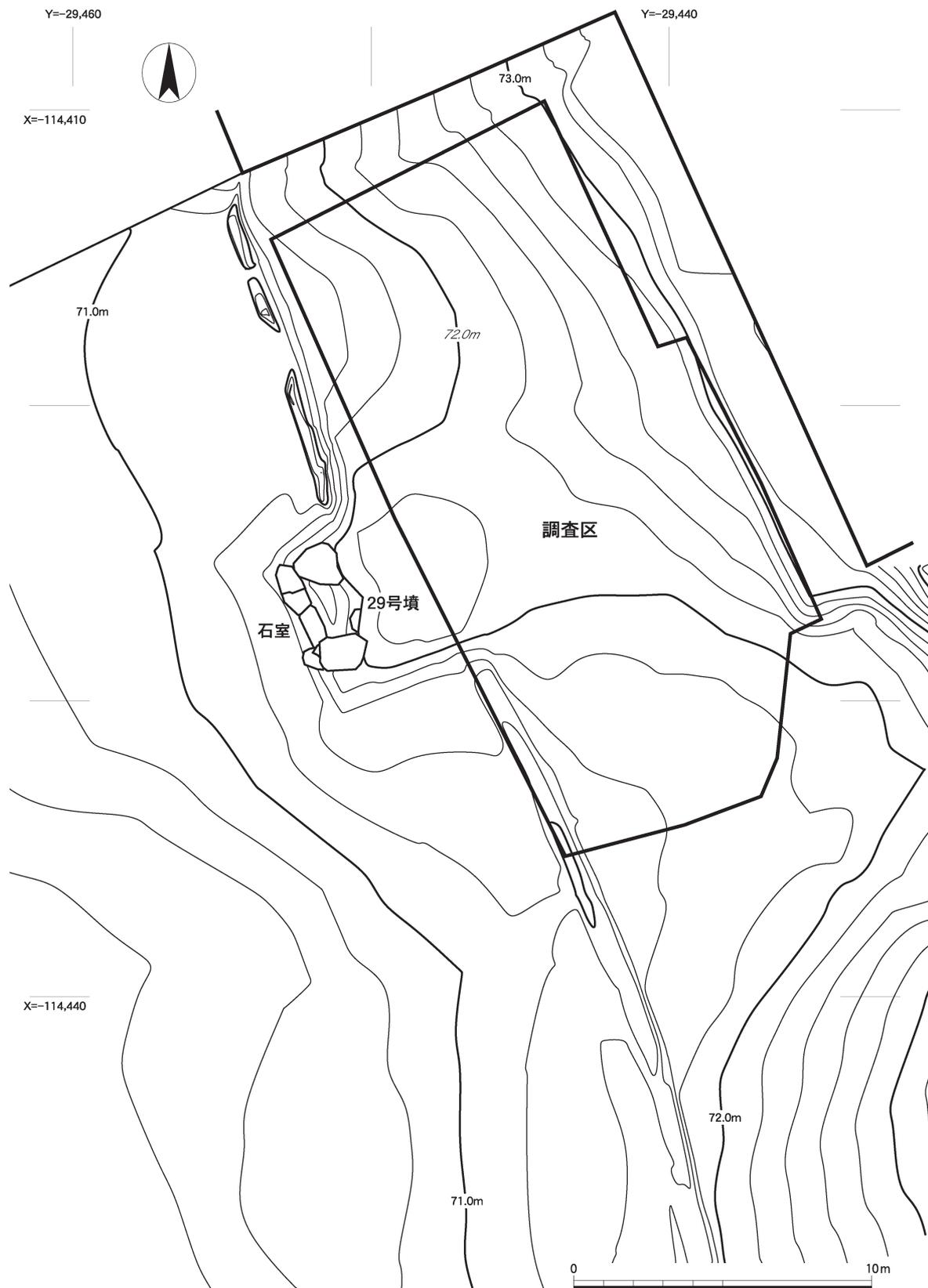
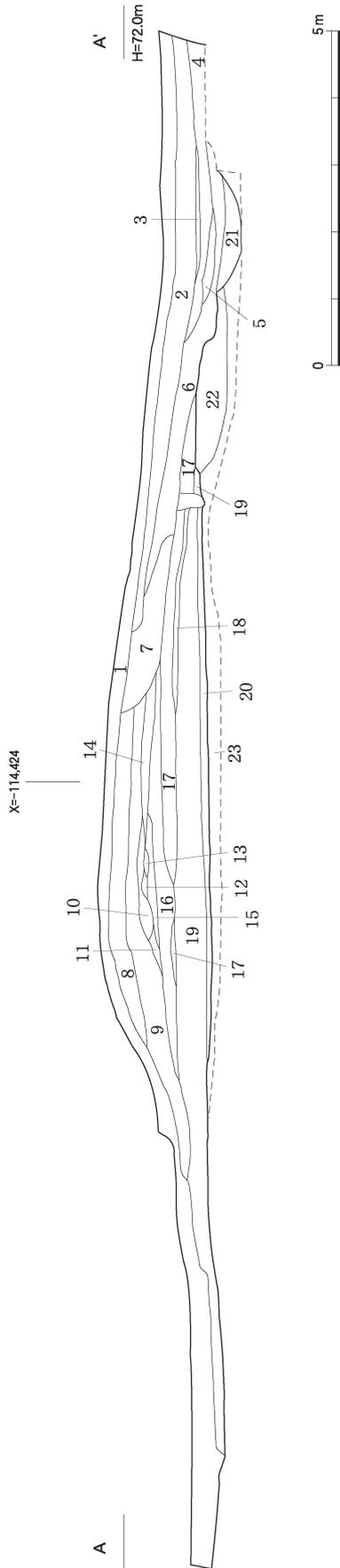


図5 調査前地形測量図 (1 : 200)



- | | | | |
|----|-------------------------------------|----|--|
| 1 | 表土 | 13 | 7.5YR5/6 明褐色泥砂 |
| 2 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ10mmの礫混 (竹林客土) | 14 | 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 |
| 3 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭化物混 (竹林客土) | 15 | 7.5YR5/4 にぶい褐色砂泥 |
| 4 | 7.5YR4/3 褐色砂泥 平安時代の遺物含む | 16 | 7.5YR4/2 灰褐色砂泥 炭・φ10~30mmの礫混 |
| 5 | 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 平安時代の遺物含む | 17 | 7.5YR5/6 明褐色砂泥・7.5YR4/4 褐色砂泥 1:1の混土 |
| 6 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 平安時代の遺物含む | 18 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 |
| 7 | 10YR4/4 褐色砂泥 φ10~100mmの礫混 平安時代の遺物含む | 19 | 5YR4/4 にぶい赤褐色粘質土 |
| 8 | 7.5YR4/4 褐色砂泥 平安時代の遺物含む | 20 | 7.5YR4/2 灰褐色砂泥 炭化物少量混 |
| 9 | 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 | 21 | 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト 炭・φ10~50mmの礫混 (29号墳間溝) |
| 10 | 7.5YR4/4 褐色粘質土 | 22 | 7.5YR4/4 褐色粘土 (地山) |
| 11 | 10YR4/4 褐色粘質土 | 23 | 5YR3/4 暗赤褐色砂質シルト (地山) |
| 12 | 7.5YR4/4 褐色粘質砂泥 | | |

図6 調査区西壁 (29号墳墳丘) A-A' 間断面図 (1:100)

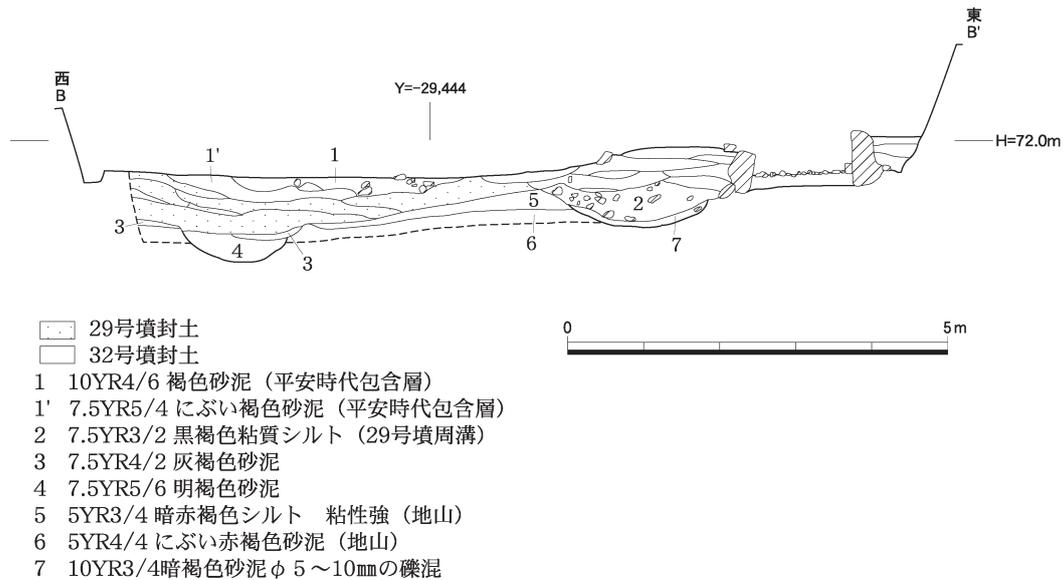


図7 29・32号墳間断割B-B'間断面図(1:100)

区内はほぼ石室の上面と同じ標高である。

墳丘および封土 古墳の西側は果樹園造成のため露出する石室の基底部あたりまで土取されているものとみられ、石室部分のみ盛り上がった状態を呈している。また、当調査地の東側にあたる地点は緩やかに東側の丘陵部側に向かって傾斜し、敷地東側の境界を境に一段高くなっている。調査前の測量図(図5)では、石室の北側と南側の一部で等高線が弧状にわずかに巡る箇所が認められ周溝の窪みともみられたが、丘陵側に堀切の痕跡もなく、現況から墳丘の形態は判断できなかった。

調査区内の断面では29号墳石室に接する断面が得られなかったため、墳丘を構成する封土の状況を把握することは困難であったが、断割トレンチによって封土とみられる堆積層を確認した。地山層とみられる暗赤褐色砂質シルト層の上面に薄く、炭化物を含む灰褐色砂泥がある。その上層に地山に近似したにぶい赤褐色粘質土が、石室に併行するところで約50cmあり、北・南に向かって薄くなる。にぶい赤褐色粘質土の上層には灰褐色～明褐色の径10～30mmの円礫を含む強く締まった層が堆積する。その上層に断面図(図6)に表した10～14層の粘質土がブロック状に堆積する。これらの層は強く締まっており、平面的には図8の平面図に示した網目にあたり、石室に併行して分布するように見え、石室を構築する封土と考える事ができる。

周溝 調査は29号墳の封土、32号墳石室を保護する目的から、一部断割で周溝の確認を行い、調査区の北側と、29・32号墳間断割トレンチで周溝とみられる溝(SD03)を検出した。幅1.8～2.5m、深さ0.3～0.55mを測る。埋土は褐色粘質シルト層で礫を多く含む。検出面では平安時代の土師器、黒色土器、緑釉陶器の小片が出土しているが、断割トレンチの溝内から須恵器甕口縁部が1点出土している。調査区の南側では周溝は確認していない。

石室とみられる石材から北側で検出した周溝までの距離は約9m、東側の断割トレンチで検出した溝までの距離は約8mあり、また地山直上に堆積する赤褐色粘質土層の南端が約9mの距離

にあることから、赤褐色粘質土層南端を墳丘裾に近い地点と推定すると、29号墳の墳丘の平面形は、直径16～18mの円墳と推定できる。

(2) 32号墳 (図8～10、図版3～5)

29号墳の東側約11mの地点で発見した横穴式石室である。当初、29号墳の東側に古墳を想定

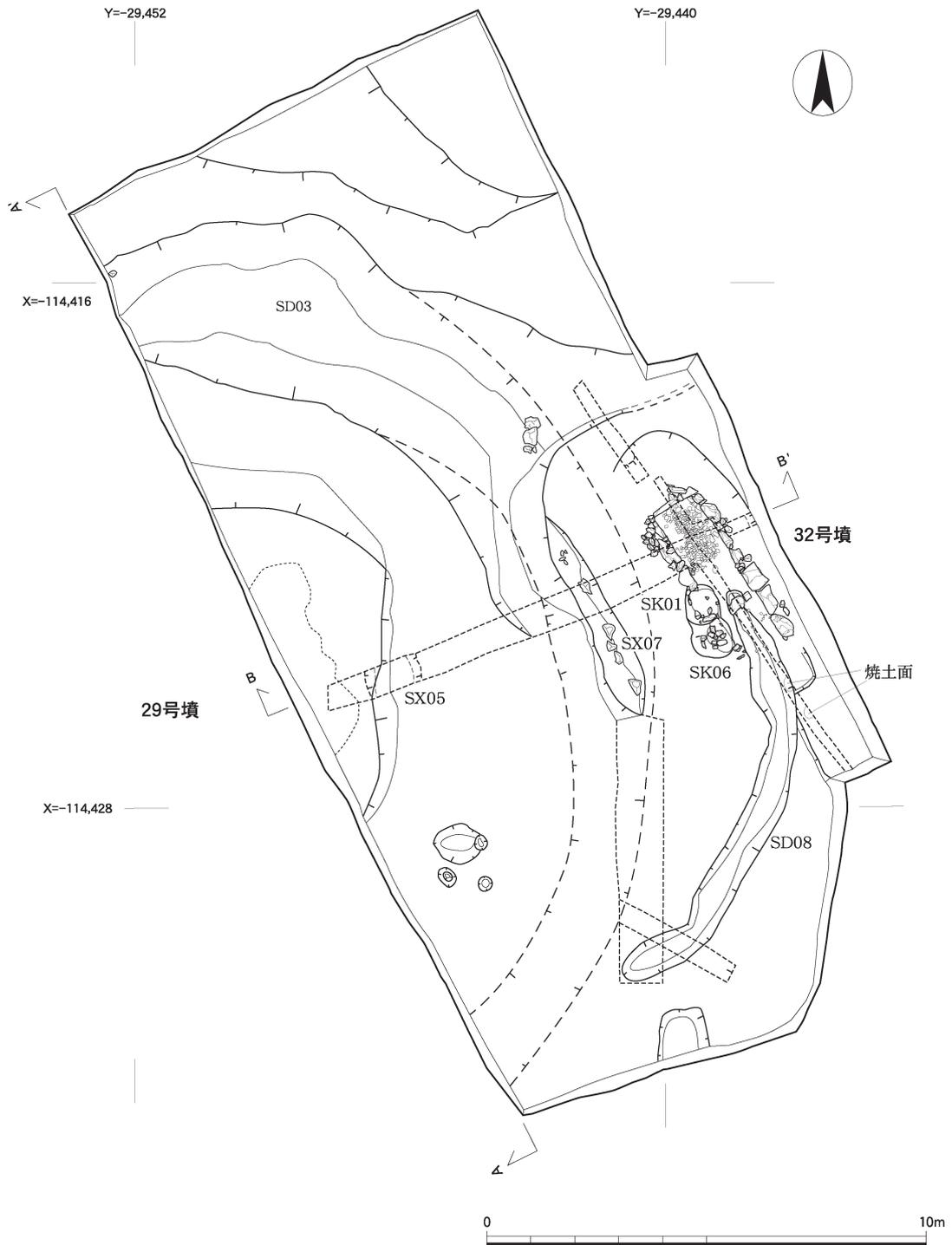
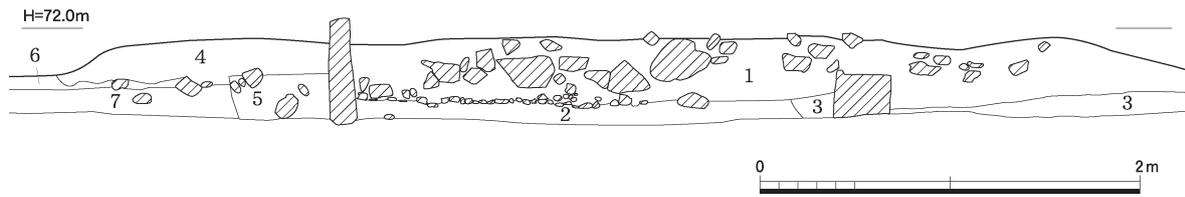


図8 遺構平面図 (1 : 150)



- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 7.5YR4/4 褐色砂質シルト 礫多く含む | 5 5YR4/2 褐灰色泥 礫含む (掘形) |
| 2 10YR7/3 にぶい黄橙色泥砂 | 6 7.5YR5/4 にぶい褐色砂泥 |
| 3 5YR4/3 にぶい赤褐色砂質シルト (排水溝) | 7 5YR5/6 明黄褐色砂質粘土 円礫混 (地山) |
| 4 7.5YR4/4 褐色砂泥 | |

図9 32号墳石室断面図 (1:40)

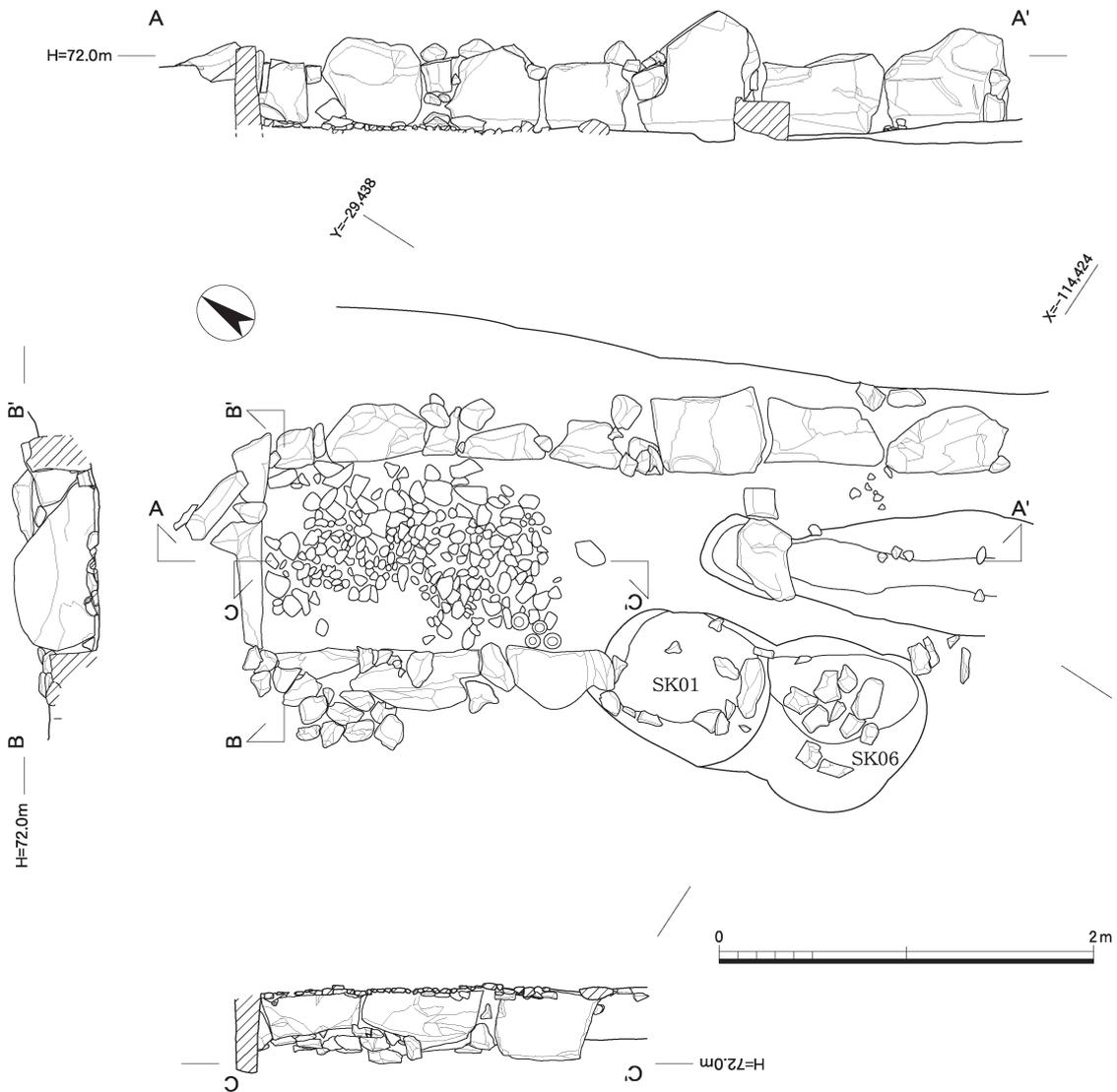


図10 32号墳石室平面・立面図 (1:40)

しておらず、29号墳の周溝または丘陵側と古墳を画す堀切の検出を目的に調査を行った。

墳丘および封土 ほぼ表土直下で石室石材を検出している。墳丘を構成する封土は石室の西側で確認することができた。石室に直交する西側の断割りトレンチで、石室の西側に約3mにわたり黄褐色から褐色の粘質シルトが認められた。石室西側は掘形が認められず、版築状に積み上げて石室を構築していったものと考えられる。

主体部 南東方向に開口する横穴式石室とみられ、石室基底部の1段分を検出した。石室内には褐色砂質シルト層が堆積し、石室の石材の残骸とみられる0.3～0.5mを測る多量の礫が混在している。現状で全長3.8m、石室幅は奥壁付近で1.1mを測る。敷石面は奥壁から1.5m付近まで残り、比較的角張った拳大からやや大きめな礫と、拳大からやや小さめな円礫を敷き詰めている。敷石面の標高は71.64mである。西側の側壁は、奥壁から4石目と5石目の2石は近世に抜きとられて、抜き取り穴は土壌状(SK01・06)を呈している。

奥壁から2.5mの位置に長軸0.5m、短軸0.3m、高さ0.35mを測る石材と拳大より大きめな扁平な石材が据えられている。閉塞石ともみれる。この石材のほぼ直下から幅約0.7m、深さ約0.15mの浅い溝(SD08)を、南西方向に湾曲しながら9mにわたって検出した。排水溝とみられる。

石室掘形は、北と東側で面的にラインを検出した。石室に直交する断割りトレンチでは地山の暗赤褐色砂質シルト層を約0.3m掘り込み側壁の石材を据える。また、石室の西側に直交する断割りトレンチでは地山層の掘り込みはみられず、石室の西側壁の西端直下に29号墳の周溝とみられる溝を検出した。32号墳の石室は溝を小礫を含む黒褐色粘質シルト層により埋めた後、石材を据えたとみられるが、断割りトレンチはこの1箇所だけなので、詳細は不明である。

なお、石室の主軸の振れは、N31°Wである。

石列(SX07) 発掘調査に先立つ試掘調査では、29号墳の墳丘を画す石列と考えられた遺構である。0.2～0.3mの石材が北西から南東方向に並び、約3.5mを検出した。32号墳石室からは西に1.35mの位置にあり、石室に平行する。墳丘を構築する際に封土の崩落を防ぐための土留めの遺構と考えられる。

焼土面 奥壁から5.5mと6.3mの位置で焼土面を確認した。ともに0.25～0.35mの不定形に地山が焼けて赤化している。焼土は非常に薄く、わずかに炭を含む。焼土の上面では焼けて劣化した土師器細片を検出した。

(3) その他の遺構

古墳に伴う遺構以外の遺構は少ない。29号墳石室の石材を抜き取ったとみられる土壌2基(SK01・06)、29・32号墳間断割りトレンチ下層で土壌(SX05)を検出した。SK01・06は出土遺物から近世以降。SX05は出土遺物が無く、時期は不明であるが、古墳時代以前とみられる。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土遺物は少なく古墳時代と平安時代の土器類が整理箱に1箱出土した。

平安時代の遺物は周溝の検出面から少量出土したが、すべて小破片である。土師器、黒色土器、緑釉陶器がある。

古墳時代の遺物は土師器と須恵器がある。土師器は甕とみられるが、焼土面から細かく破碎された状態で出土しており、復元が困難であった。

表土除去中および遺構検出中に陶棺(図版6-9)とみられる破片が5点出土している。すべて小破片であるが、土師質亀甲形陶棺である。

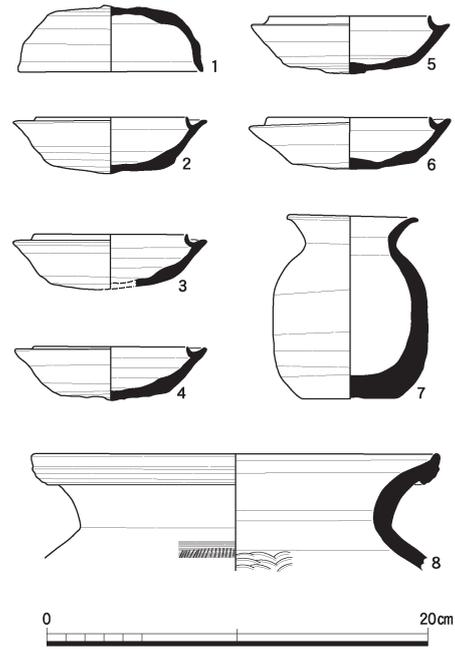


図11 遺物実測図(1:4)

(2) 29号墳周溝出土遺物(図11、図版6)

須恵器甕口縁部1点(8)が出土した。体部内面に青海波のあて具痕、体部外面はカキ目の後、縦方向のタタキを施す。口縁端部はつまみ上げたように直立する。

(3) 32号墳石室出土遺物(図11、図版6)

敷石面で須恵器壺(7)、杯身4点(2・4~6)が、敷石面より浮いた状態で須恵器杯身(3)、杯蓋(1)が出土している。7はほぼ奥壁に接した位置で口縁部を上、北側に傾いた状態で出土している。杯身は奥壁から1.3~1.6mの西壁際から出土している。4のみ敷石面に口縁部を伏せた状態で出土している。杯身の受け部の立ち上がりは短く直立する。壺も含め焼成は堅微で胎土も精良である。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師質土器		陶棺1点		
飛鳥時代	須恵器		須恵器8点		
平安時代	土師器、黒色土器、緑釉陶器				
合計		2箱	9点(1箱)	0箱	1箱

5. ま と め

今回の調査では周知の29号墳のほかに、やや小型で無袖式とみられる横穴式石室をもつ32号墳を新たに検出した。

29号墳の石室は調査区外になるため調査できなかったが、調査区内に石室の痕跡は検出されず、32号墳と同じく南東方向に開口する横穴式石室とみられることが推定できた。

32号墳は長さ3.8m、幅1.1mを測る南東方向に開口する横穴式石室である。石室敷石面から出土した須恵器杯はTK217～46型式に比定でき、7世紀中葉を前後する築造時期を求めることができる。墳丘の平面形、規模を確認することはできなかった。

当該地の北約60mの地点で30・31号墳が立会調査によって検出され、30号墳は羨道部より出土した遺物から7世紀中頃から後半に比定される⁸⁾。31号墳は推定玄室長3m、幅1.2mの規模をもつ石室である⁹⁾。また、洛西ニュータウンに伴う調査で明らかとなった古墳のうち、23号墳は全長2m、幅1mの小型化された石室であり、24号墳は全長1.8m、幅0.5mの小石室であった¹⁰⁾。これらから、これまで福西古墳群は6世紀後半から7世紀前半に構築された古墳群であると考えられてきたが、7世紀中頃を中心にいわゆる終末期の古墳群も展開していたと考えられる。

このほか、土師質亀甲形陶棺の破片が出土した。福西古墳群の中では石棺の出土は知られていなかったが、陶棺の出土は初めてであり、古墳群の性格を考察するうえでも資料の増加が望まれる。

表4 遺物観察表

番号	器形	口径	器高	胎土	色調	焼成	手法・形態の特徴	備考	残存
1	杯蓋	9.8	3.5	2.5YR4/4にぶい赤褐色 径0.5～1mmの石粒含む	内:2.5YR4/1赤灰色 外:2.5YR5/3にぶい赤褐色	堅微	天井内面は回転ナデ後仕上げナデ。外面はへら切り。体部は回転ナデ。	天井部内面に粘土塊附着	98%
2	杯身	7.8	3.0	径0.5～2mmの石粒少量含む	内:5YR4/2灰褐色 外:7.5YR4/1褐灰色	堅微	底部外面へら切り。他は回転ナデ。受部の端部はやや丸みがあり、立ち上がりは短く直立。	歪み著しい	完形
3	杯身	8.0	3.9	径0.5～1mmの石粒含む 2.5YR5/3にぶい赤褐色	内:N3/0暗灰色 外:7.5YR3/1暗赤灰色	堅微	底部外面へら切り。他は回転ナデ。受部の立ち上がりは短く直立。		70%
4	杯身	8.0	2.8	径0.5～1mmの石粒含む	内:10R3/1暗赤灰色 外:7.5R3/1暗赤灰色	堅微	底部外面へら切り。内面は回転ナデ後仕上げナデ。他は回転ナデ。受部立ち上がりは受部と同じ長さで非常に短い。		完形
5	杯身	8.4	3.1	5YR6/3にぶい橙色 径0.5～1mmの石粒含む	内:10R3/1暗赤灰色 外:10R4/2灰赤色	堅微	底部外面へら切り。他は回転ナデ。受部の端部はやや丸みがあり、立ち上がりは短く直立。		98%
6	杯身	8.4	2.7	径0.5～1mmの石粒含む	内:N4/0灰色 外:N4/0灰色	堅微	底部外面へら切り。内面は回転ナデ後仕上げナデ。他は回転ナデ。受部立ち上がりは受部と同じ長さで非常に短い。		完形
7	壺	6.5	9.8	径0.5～2mmの石粒少量含む	内:2.5Y4/1黄灰色 外:N7/0灰白色～N5/0灰色	堅微	底部外面へら切り。体部への立ち上がり部は不定方向のナデ。体部下半はへらケズリ後ナデ。体部中央は回転ナデ後不定方向のナデ。口縁部から内面は回転ナデ。※へらケズリは一周せず、手持ちで削る。	部分的に自然釉	完形
8	甗	21.0		N7/0灰白色 径0.5～2mmの白色石粒 やや多く含む	内:N7/0灰白色 外:N5/0灰色	堅微	体部外面はカキ目後縦方向のタタキ。体部内面あて具痕は青海波。口縁部は回転ナデ。端部はつまみ上げように直立する。		

註

- 1) 『京都府遺跡地図 史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図』第4分冊 京都府教育委員会 1972年
- 2) 文献3
- 3) 文献1
- 4) 文献2
- 5) 文献3
- 6) 洛西ニュータウンに伴う調査は4度実施されている。
第1次調査 1970年7～8月 1～4・6号墳 文献4
第2次調査 1971年7月 5・7～11号墳 文献5
第3次調査 1972年12月 11号墳の再調査 文献6
第4次調査 1973年9月 5・23～25号墳 文献7
- 7) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- 8) 文献8
- 9) 文献9
- 10) 文献7

参考文献

- 文献1 藤沢長治「京都大枝福西古墳」『京都府埋蔵文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会 1961年
- 文献2 堤圭三郎 高橋美久二「向日丘陵地遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1968年
- 文献3 『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会 1971年
- 文献4 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査－福西古墳群の発掘調査報告－』京都市都市開発局洛西開発室 1970年
- 文献5 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査－発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告－』京都市都市開発局洛西開発室 1972年
- 文献6 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査－発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告－補遺編』京都市都市開発局洛西開発室 1973年
- 文献7 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査－補遺編その2－』京都市都市開発局洛西開発室 1973年
- 文献8 吉村正親「福西22号墳(90MK10)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1991年
- 文献9 玉村登志夫「福西28号墳 No.68」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1992年
- 文献10 北田栄造「福西4号墳 No.93」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局 2005年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくにしこふんぐん							
書名	福西古墳群							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-5							
編著者名	菅田 薫							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年7月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふくにしこふんぐん 福西古墳群 (29・32号墳)	きょうとしにしきょうく 京都市西京区 おおえひがしながちょう 大枝東長町 1-208、209	26100	998	34度 58分 05秒	135度 40分 39秒	2006年4月 24日～2006 年5月17日	249m ²	集合住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福西古墳群 (29・32号墳)	古墳	古墳時代	横穴式石室、排水 溝、石列、焼土	土師質土器				
		飛鳥時代	周溝	須恵器				
		平安時代		土師器、黒色土器、緑 釉陶器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-5

福西古墳群

発行日 2006年7月14日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961